

CONTENTS

- 展覧会のご案内
  - 「一宮三八市のにぎわい」
  - 「くらしの道具～今と昔～」
- 博物館アルバム（4～9月）
- 資料紹介 山本梅逸《四季花鳥図》
- 文化財保護事業 籠守黒田大明神本地之像
- 平成20年度下半期催し物のご案内

一宮市  
博物館  
だより

No. 43 2008. 10



市取締定書 巳10月(文政4年(1821)カ)

一宮市博物館蔵

商いや火の元用心、治安の維持など、三八市取締についての定が記されている。

関連行事

◎講演

『尾張の「在方町」を考える』

10月19日(日)  
名古屋芸術大学教授 松田憲治氏  
『「尾張」の市場覚書』

10月26日(日)  
愛西市教育委員会学芸員 石田泰弘氏  
『やきもの文化を語る—瀬戸物の流通—』

11月2日(日)  
愛知県陶磁資料館副館長 仲野泰裕氏  
(愛知県陶磁資料館共催講演会)

『尾張の名産と流通』  
11月16日(日)  
日本福祉大学准教授 曲田浩和氏

◎公演

『尾張万歳』 尾張万歳保存会

11月9日(日)  
講演・公演ともに時間  
午後1時30分～3時  
定員100名(当日正午より整理券を配付)

◎イベント

『三八茶屋』 呈茶料:100円  
会期中の3と8のつく日に開催  
午前10時～午後12時、午後1時～3時  
※お茶とお菓子の数には限りがあります。

# 一宮三八市の にぎわい

平成20年度企画展

2008.  
10.11(土)–11.24(月・振休)

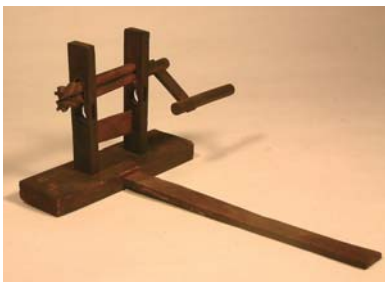
かつて一宮には、「三八市」と称する市場がありました。物資の交換の場であった市場は、人々が生活するうえで必要不可欠なものであり、今日の生活にもかかせないものとなっています。一宮の三八市も、江戸時代から生活必需品や綿業関係商品などの集散地として大変なにぎわいをみせていました。

本展覧会では、三八市やここに集った商品の流通、生産などに関する歴史の一端を紹介するとともに、一宮周辺の村々で開催されていた市場と比較しながら、その機能についても考えます。

享保十二年(一七二七)、三八市は一宮村の村人達の願いにより公認市場となりました。それ以来、三八市は真清田神社の門前で開かれていくこととなります。開市当初の三八市は、小規模なものであったようです。しかし、農民による商品流通が発展していくと、三八市は物資の交換取引の場として大変なにぎわいをみせ、尾張西部の中心的市场の一つとなりました。

江戸時代後期の天保十三年(二八四二)寅八月吉日付の「一宮六斎市商人書上下帳」(『一宮市史下巻』所収)によれば、五百以上の店が真清田神社の門前に軒をつらね、生活必需品や綿業関係商品などの多彩な商品が売買されていた様子を知ることができます。取り扱われていた商品の内で、古手屋は最も多く、次いで糸売買、綿屋の順になります。

また、『尾張名所図会』に描かれる「一宮月並市」(右下写)



《綿線口クロ》 明治時代 一宮市博物館蔵  
ワタの実を繊維と種子にわけするための道具で、一宮村の名産品として取引されていた。

「一宮月並市」(『尾張名所図会』より)  
明治13年(1880)刊 一宮市博物館蔵



真)からは、視覚的に往時の盛況振りを知ることができます。そこには常設店舗だけでなく、綿線口クロ(左上写真)や糸車、綿、桶などを扱う仮設店舗も描かれ、これらの商品を求めて大変多くの人々にぎわう様子が見て取れます。

本展覧会では、多くの人や物が行き交う結節点として機能していた、当時の三八市の様子について、文献史料を中心に展示します。(坪内淳仁)

◆インフォメーション◆

【会期】10月11日(土)～11月24日(月・振休)  
【休館日】

10月14日(火)・20日(月)・27日(月)、  
11月4日(火)・10日(月)・17日(月)

【開館時間】午前9時30分～午後5時  
(入館は4時30分まで)

【観覧料】(常設展含む)  
一般200円(160円)、高校・大学生100円  
(80円)、小・中学生50円(40円)

※( )内は20人以上の団体  
※市内小・中学生は無料。

※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料。

※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料。

※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料。

## 「町」のような村・在方町

江戸時代には、徳川幕府による兵農・商農分離政策などにより、町方と在方、すなわち都市と農村は、法的にも地域的にも区別されました。この政策によって、城下町（都市）には商工業者の移住が進められ、農村には農民が居住することとなりました。

しかし、十八世紀ともなると、農民による商品生産が発展し、農村にも農業以外を職業とする者が多く居住するようになります。こうした法制上は村として把握され、年貢諸役を負担する一方で、商工業をも生業とする者が多く住む村を「在方町」といいます。

◎一宮村 尾張国一宮である真清田神社の門前町として知られ、戦国時代には城も築かれていました。江戸時代になると、名古屋と岐阜を結ぶ岐阜街道の宿場として、そして享保十二年（二七二七）からは六斎市が開催される地として、にぎわいました。

◎黒田村 かつて鎌倉街道が通る宿場町でした。市場も古くから成立していたようで、戦国時代には城もありまし

た。元禄元年（一六八八）に六斎市が許可されています。

◎刈安賀村 戦国時代には城がありました。江戸時代には村の東西を巡見街道が通り、享保十三年（一七二八）からは六斎市が立てられていました。

◎起村 慶長五年（一六〇〇）に東海道宮宿から中山道垂井宿を結ぶ脇往還・美濃路の宿場町として整備され、木曾川渡河の要所ともなっています。六斎市は、享保十六年（一七三二）に許可されています。

こうした村々は、起村を除くと石高二千石以上、人口千人以上の大きな村でした。また、門前町、宿場町、六斎市が立てられた村、あるいは戦国時代の城下町という由緒を持つ、という共通点を見出すことができます。そして、多くの人々や物が行き交う結節点として、地域の中心的な村落であるとともに、綿業をはじめとする様々な生業をする者たちが居住し、豊かな人的・経済的力量を備えた村々であったといえるでしょう。

### 企画展

# くらしの道具

## くらしの道具

2009年  
1月10日(土)～  
3月1日(日)

この展覧会は、平成三年度から十六年の長い期間にわたって毎年継続開催してきた、小学校四年生のための展覧会です。

平成十四年度からは、今と昔という時間軸だけではなく、自然環境によって暮らし方が異なるという空間軸を取り入れました。木でできた道具が多い山の暮らし、流通品が多い平野や海の暮らし。今年のくらし展も、道具の違いを探して、「平野の暮らしを考える」という方向性で展示をします。

展覧会開催中には市内四十二校の四千人を越える小学校四年生が来館しますが、見学の前には必ず学校で道具展のカードを作成し、予習をしてから展示を見ます。（久保禎子）

▶昨年度までの展示の様子



▶道具展のカード

<p>こねばち</p>	<p>いかき</p>
<p>くど</p>	<p>はこぜん</p>

今とむかしをくらべてみよう

<p>今のくどち</p>	<p>むかしのくどち</p>
<p>むかしの家(農家)</p>	

むかしの家のオモヤ

# 博物館アルバム

平成20年度4月～9月には、6つの展覧会、2つの通年講座をはじめ、いろいろなイベントを開催しました。博物館の半年間を写真とともに振り返ります。

## 特別展「いまあざやかに まるいきんげい 丸井金祝展」 4月26日(土)～6月1日(日)

古くからの伝統を持った一宮市域は、日本画では川合玉堂、洋画では佐分眞、三岸節子らを輩出しています。しかし、まだ知られざる作家も多くいます。今回の展覧会は、そのうちのひとり、日本画家・丸井金祝を紹介するものでした。

展示作品は、丸井金祝の学生時代の植物写生作品(美術学校の課題作品)から始まり、展覧会入賞作品、古今東西の要素を融合させたような独特の画風の屏風仕立ての大作2点、東宝劇場の階段壁画作品の大下図、神奈川県工業高校教諭時代に制作したデザイン画、木工品、それにポストカードといった小さな作品まで総数82点を展覧しました。

作品はこれまでほとんど展示されず、遺族を中心に保管されてきました。そのため各作品の保存状態はおおむね良好で、大和絵の技法を取り入れながら、金祝独自の研究によって人物や動物を鮮やかな色彩で描き出した世界に、観覧の皆さんから感嘆の声が寄せられました。

会期中の5月4日(日)には、明星大学造形芸術学部准教授山本陽子氏と丸井金祝の孫である丸井隆人氏による講演会「美術の遺伝子」を開催。また、学芸員によるギャラリートークも5月10日(土)・18日(日)に開催し(写真)、日本画家・丸井金祝の姿を知っていただきました。



### 博物館学芸員による歴史の授業

一宮市では、学芸員が市内の小学校に赴き、6年生を対象にした歴史の授業を行っています。平成16年度から4年目の今年は、博物館の収蔵資料を活用した7つのテーマの授業を設けました。「水墨画に見る室町時代の文化交流」(写真・今伊勢小提供)では、画賛に注目して万里集九や雪舟にまつわる郷土の歴史を探りました。

### ミュージアムキッズクラブ(通年)

6月8日(日)「涅槃図でお話をつくろう!」  
9月27日(土)・10月4日(土)「茶の湯の心を学ぶ」  
市内の小学校4～6年生を対象に、歴史・民俗・考古・自然・美術などの多様な分野を総合的に学ぶ講座です。今年度は総勢37名と大所帯でのスタートになりました。第1回の講座(写真)では、創作を通して涅槃図への理解を深めました。

### 第17回古文書講座(通年・毎月第2土曜日)

西大海道村区有文書をテキストとして使用しています。江戸時代の西大海道村は、『尾張御行記』によれば、高310石余の村で蔵入地のほか、内藤氏、神谷氏他7名の給地がありました。これまでに村絵図や宗門改帳、五人組連印帳などを通して、古文書の解説と江戸時代の人々の暮らしや生活文化を学んでいます。



上 / 遠賀川式壺形土器  
下 / 削痕深鉢形土器

平成八年と九年に実施した丹陽町伝法寺地内の遺跡発掘調査のうち、元屋敷遺跡出土の弥生土器をまとめた報告書を刊行しました。元屋敷遺跡では、弥生時代前期、古墳時代前期、そして中世・戦国期の遺構・遺物が出土していますが、弥生時代前期の元屋敷遺跡は、いわゆる環濠集落(周囲を溝に囲まれた集落跡)と推定されています。遺物は、こうした環濠や、集落内の溝、住居跡と考えられる土坑などから出土しています。遠賀川系土器の壺・甕と削痕深鉢形土器を主体とし、条痕文土器を含むという様相は、三ツ井遺跡と類似し、縄文時代後期の土器を含む点については、三ツ井遺跡とともに岩倉市権現山遺跡とも共通します。これらの三遺跡から抽出される尾張平野北西部に位置する当地域の弥生時代前期の様相は、『弥生石器編』(後日刊行予定)の中で、明らかにできると考えています。

### 刊行物のご案内



A4判、128ページ。  
1部800円。  
博物館受付にて販売。



## 企画展「土と炎の芸術～世界の土器～」

7月5日(土)～8月3日(日)

本展覧会は、愛知県陶磁資料館の収蔵資料を中心として、日本・東南アジア・南アジア・西アジア・中国・南アメリカから出土した土器を展示し、日本の縄文～古墳時代の土器と同時期の世界の土器を比較しました。 ●入館者数 1726 人

### ◎会期中のイベント

○7月6日(日)

講演会「世界の土器を語る」とティーパーティー・中国編(写真左上)

講演会講師:愛知県陶磁資料館主任学芸員 森達也氏

文士茶礼:茶遊苑 山口典子氏ほか ●参加者 43 人

○7月20日(日)

ギャラリートーク「世界の土器を語る」 ●参加者 60 人

講師:愛知県陶磁資料館学芸員 小川裕紀氏

ティーパーティー・タイ編(谷スマニー氏) ●参加者 130 人(写真左下)

○8月3日(日)

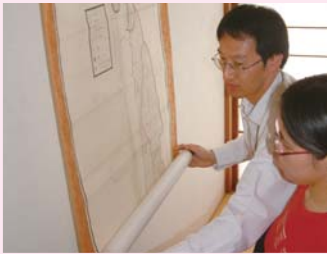
世界の土偶を作ろう! ●参加者 130 人

ティーパーティー・イラン編(仁キヤリム氏) ●参加者 340 人(写真右下)



## 中学生職場体験

夏休み期間中に中学生が職場体験にやってきました。今年度は、浅井・丹陽・中部・西成・萩原・尾西第一(写真)・大和・大和南の8校30人のみなさんでした。1～3日間の職場体験期間中、受付対応・資料整理など、様々な仕事を体験してもらいました。将来社会で働く際の糧になれば幸いです。



## 一宮市子ども写生大会作品展 8月9日(土)～20日(水)

毎年開かれている市内の幼稚園・保育園児、小・中学生による子ども写生大会の作品の中から上位入賞作品・学校代表作品 359 点が展示されました。(一宮市教育委員会主催)

※一宮市三岸節子記念美術館でも開催  
8月22日(金)～31日(日)



## 博物館実習

7～9月の約6日間、学芸員資格の取得を目指す6名が考古、民俗、歴史・美術工芸の3部門に分かれて博物館実習を受けました。展覧会の展示・撤収作業や催事の補助、資料の取り扱い方の講習(写真)などを通して、博物館の役割や運営について理解を深めることができたとします。

## 夏休み子ども展示「江戸時代の写生」 8月9日(土)～24日(日)

「写生」をテーマに当館収蔵品の一部を展示しました。子ども向けのワークシートの配布をはじめ、8月10日(日)・17日(日)にはギャラリートークも行いました(写真)。感想カードを用意したところ、学芸員が驚くような発見をしてくれた子もいました。



## 「自分のかけらを作る」

9月21日(日)午後1時30分～3時

愛知県陶磁資料館の依頼を受け、博物館中庭において愛知県陶磁資料館開館30周年記念ワークショップを協力開催しました。愛知県陶磁資料館は今年度で開館30周年を迎え、その記念として陶磁資料館壁面に幅1m×10mのモニュメントを制作する予定です。そのモニュメントに貼付ける陶芸作品「自分のかけら」を制作するワークショップを実施しました。

## 「一宮写真協会選抜写真展」

9月18日(木)～28日(日)

一宮写真協会より選抜された30人による写真展を開催しました。「伝えたい 今日から 明日へ。」を今年度のテーマにそれぞれの感性に裏打ちされた表現力で、熱い思いを込めた作品52点が展示されました。モノクロ、カラーを問わず、作品のもつ力に来場者は見入っていました。

## 「2008 一宮美術作家新展」

8月30日(土)～9月15日(月・祝)

一宮美術作家協会に所属する作家のうち49人が作品60点を展示し、最新のイメージを展開しました。また、左合英明、若月陽子、真下賢一の三氏の作品を特別展示しました。絵画・平面、彫塑・立体、デザイン・工芸と各作家の個性あふれる多彩な作風を楽しむことができました。今年度は博物館中庭にも作品の展示し、初秋の風のもと作品をさまざまな角度から見ていただきました。

## 山本梅逸 《四季花鳥図》

全 15 幅 絹本着色・軸装 嘉永 4 年 (1851)  
 縦 27.5 × 横 39.5cm、総丈 116.0 × 50.5cm (各幅)  
 花果画帖を明治 40 年 (1907) に軸装仕立て  
 今尾景年書付「梅逸翁真跡 画帖十五葉 明治丁未小  
 春装漢成図 景年観併書 (印)」  
 平成 7 年 (1995) 寄贈



〈桃に髪切虫〉

十五幅の横長の画面の中に花や果物、虫などが描かれていますが、左上に掲げた「桃に髪切虫」には、画面中央にモモの実のついた枝が置かれ、その先にカミキリムシが逆さまに止まっています。カミキリムシの背の白い斑点や触角の節まで描きこまれた写実的な表現に対して、モモの実の付け根から放射線状に伸びる葉は輪郭線を描かない没骨技法で、弓形に曲がった枝は筆の勢いをそのまま活かした付立技法で表されています。枝にそって二個のモモの実とカミキリムシ、さらに落款がバランス良く配され、画面に品良く対象が収められています。小幅ながら、様々な技法や巧みな構図が用いられ、色の対比も美しい佳品といえます。また、各幅に記された落款には様々な書体や印章が用いられ、落款研究の上からも興味深いです。

## 花鳥画家・山本梅逸

この作品を描いたのは、江戸時代後期に活躍した名古屋出身の画家・山本梅逸（一七八三）



〈河骨に蛙と蝗虫〉

一八五七)です。〈月下蘆原に群鴨〉及び〈朝顔と花瓶〉に記された落款から、嘉永四年（一八五二）、梅逸六十九歳の作品だと分かります。

梅逸は同じ名古屋出身の画家・小林竹洞と並び称される画家です。山水画を得意とした竹洞に対して、梅逸は花鳥画において定評がありました。梅逸は享和二年（一八〇二）に竹洞とともに上洛したのを皮切りに、その後たびたび京都を訪れ、天保二年（一八三一）前後に京都に移住します。以後、安政元年（一八五四）に名古屋へ戻るまでの約二十三年間、京都に拠点を置きます。



〈川魚に蓮と慈姑と菱〉

梅逸や竹洞の作風は、一般に南画（文人画）に分類されます。南画の特色としては、中国文人画に範を求めた画題や画風、主観に重きを置く描写などが挙げられます。しかしながら、梅逸が活躍した頃の京都では、写生に基礎を置いた抒情的な円山四条派が幅広い支持を得ていました。梅逸の初期作品には、中国から移入された画譜（絵手本）や清人によって伝えられた南蘋流の影響が色濃いですが、京都移住後は円山四条派の色彩やモチーフなどを取り入れていきます。本作品に見られる形態的確な描写や色彩感覚はその成果といえるでしょう。

## 描かれたモチーフ

身近に置いて楽しめる画帖は江戸時代にもはやされましたが、梅逸は本作品の制作にあたり、以前に描いた作品の中からモチーフを選んで構成し直しています。例えば、〈河骨に蛙と蝗虫〉に描かれたコウホネに二匹のカエルとイナゴの組み合わせは、弘化元年（一八四四）に描かれた《花卉草虫図》（名古屋博物館蔵）の中に見出すことができます。また、〈川魚に蓮と慈姑と菱〉は、弘化四年（一八四七）の《魚蔬図》に描かれたモチーフをいくつかピックアップしたものです。これらは大幅に多くのモチーフを配するとは異なつた絶妙な構図で描かれています。

このように本作品からは、梅逸が京都移住後二十年を経て、自らの画風を確立した様子が見えられます。（成河端子）

## ◆主な参考文献

『特別展 南画家 山本梅逸―華麗なる花鳥・山水の風雅―』図録、名古屋博物館、平成十年四月十一日〜五月十日

# 文化財保護事業

一宮市では文化財の管理、修理等の保存活用に要する経費の一部を一宮市文化財保護条例に基づき補助金を交付する等の保護活動をしています。ここでは、昨年度に保存修理された文化財の一例を紹介いたします。

## 籠守勝手神社の由来

### 籠守黒田大明神本地之像

絹本着色・軸装 縦100×横40cm  
 木曾川町黒田・籠守勝手神社蔵  
 箱書「籠守黒田大明神本地之像 黒田宿法連寺什物」  
 外題「丹生四所明神 法連寺什物」  
 旧木曾川町指定文化財(昭和44年指定)  
 平成17年の合併により一宮市指定文化財  
 ※法連寺(市内木曾川町黒田)はかつての神宮寺



保存修理後



保存修理前

籠守勝手神社は市内木曾川町黒田にあり、祭神は瀬織津比咩命と淀比咩命です。創建年代は不詳ですが、社名について次のような伝説が伝わっています。  
 紀元一〇四年、市辺押盤皇子が大泊瀬幼武王により殺害され、残された二人の子・億計王と弘計王は尾張一宮真清田神社

に逃れる途中、黒田明神の社森に駕籠を留めてその中で一夜を過ごしました。その際に村人が里芋による饗応をしたところ、二皇子は非常に喜ばれ、その礼にと芋の葉に夜露を集めて、黒田明神に奉献しました。このことにより、黒田明神を籠守勝手大明神と尊称するようになったといわれています。今でもこの故事にちなみ、御駕籠祭(芋名月)の神事が行われています。

また、江戸時代に奈良大峰山信仰がこの地方で盛んになり、吉野水分神社(子守明神、子守宮とも呼ばれる)・勝手神社を勧請したことにより、混交されたものともいわれています。

## 丹生四所明神

外題にある丹生四所明神とは高野四所明神ともいい、高野一山の地主神のことで、これらを集めて描いたものを高野曼荼羅

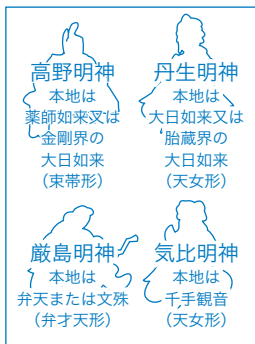


図)高野四所明神の尊像の例

と呼びます。弘法大師空海が寺院建設地を探していた折に、二頭の犬を連れた高野明神(狩場明神)の導きにより丹生明神から高野の地を教示され与えられたという高野山開基の縁起によります。その画像の多くは本地垂迹説に基づき、宮廷風の背景に和装束や唐装束の神像が描かれ、仏法の守護神として尊ばれました(左上図参照)。

## 保存修理

保存修理は京都市の株式会社墨申堂で施行されました。

保存修理前の状況として、本紙は裏打ち紙から浮き上がり、彩色が裏打ち紙へ移動し、また絵具の欠落も生じていました。特に緑青部上の絵具は脆弱な状態でした。本紙全体に横折れが生じ、料絹が磨耗していました。本紙上部には濃いシミ、左の獅子の上には虫触がありました。

保存修理として、裏打ち紙に移った絵具は膠溶液を使用して本紙へ再付着させました。その後、肌裏紙の繊維を少しずつ除去しましたが、絵具に絡んでいる繊維は残しました。絵具の剥

落止めを本紙全体に行い、特に緑青部については入念に行いました。汚れは浄水を含ませた紙を使用して除去し、折損部分には美濃紙を用いて折れ伏せを施しました。表装は旧表装の印象と著しく異ならないようにし、桐太巻添軸、桐屋郎箱を新調しました。(齋藤 晶)



▲除去した肌裏紙



◀保存修理中の一コマ

◆主な参考・引用文献

- 『籠守黒田大明神本地之像修理報告書』
- 木曾川町『木曾川町史』一九八一
- 本宮川町教育委員会『木曾川町の文化財第一集』一九七四
- 景山春樹編『日本の美術十八 神道美術』一九六七
- 佐和隆研編『仏像辞典』一九九三
- 関口正之編『日本の美術二七四 垂迹画』一九八九
- 園田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』二〇〇四

# 平成 20 年度下半期催し物のご案内

## 企画展「一宮三八市のにぎわい」

10月11日(土)～11月24日(月・振休)

## 企画展「2008 一宮市現代作家美術秀選展」

12月6日(土)～12月21日(日)

2008年11月に開催される第66回一宮市美術展の成果等を受けて、日本画、洋画、彫塑、工芸、デザイン、書、ならびに写真の部門ごとの一宮市美術展依頼出品者、市長賞受賞者、協会推薦者の作品およそ80点を展示します。

この展覧会によって、美術を愛好する市民のみなさまに一宮市の美術文化作品の精華を再認識し、より一層美術振興の現状を知っていただけるものと思います。

## 企画展「くらしの道具～今と昔～」

2009年1月10日(土)～3月1日(日)

## 市民文化財めぐり 11月7日(金) 午前9時～午後3時30分

文化財保護月間に合わせ、市内にある文化財を文化財保護審議会委員の解説により観覧。  
コース●常念寺→真清田神社→木曾川資料館→[昼食]→尾西歴史民俗資料館別館林家住宅→森川家住宅外観→妙興寺→博物館(企画展「一宮三八市のにぎわい」) 定員●33人(抽選)  
参加料●1300円(入館料・昼食代を含む) 申込●10月17日(金)までに葉書で博物館へ  
**尾張平野を語る 13～尾張藩と木曾川～**

2009年2月15・22日、3月1・8・15日の各日曜日

この講座では、歴史・自然・民俗など広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野-特に尾張平野についてこれまでも考えてきました。13回目となる今回は、江戸時代の尾張西部と木曾川にスポットをあて、尾張藩と木曾川をめぐる政治、制度、産業などについて考えます。

**民俗芸能公演** 2009年3月22日(日) 午後1時30分～3時  
一宮市内には、山車祭礼として知られる石刀祭や津島祭の系譜をひく黒岩川祭りなど、特徴的な祭礼が残っています。また、ばしょう踊という雨乞い踊りや島文楽(写真上)、宮後住吉踊(写真下)も絶えることなく伝承されています。博物館では、毎年これらの芸能を紹介しています。



現在の一宮市木曾川町に生まれ、岐阜で育った川合玉堂(一八七三～一九五七)は、望月玉泉・幸野棟嶺・橋本雅邦に師事し、円山四条派と狩野派を融和させた独自の境地を開きました。そして、日本の四季が織りなす美しい自然とそこに生きる人々や動物たちを温かい眼差しで詩情豊かに描いて多くの名作を遺しました。

本展では、玉堂の描いた動物作品十七点を紹介します。日本では、江戸時代に中国の本草学とともに西洋の博物学が盛んになり、実物を見て精密な写生画を描くということが多く行われてきました。玉堂もやはり写生を基礎として絵画を学んだ一人です。日本のあらゆる伝統画法を習得し、その技術を現代に伝えた、筆の芸術家ともいえる玉堂の多彩な技をご鑑賞ください。



## 玉堂記念木曾川図書館 第8回川合玉堂展

10月18日(土)～  
11月16日(日)

上/《双兔》1921年 玉堂美術館  
左上/《小春日》1921年頃 一宮市博物館  
左下/《鵜舟》1942年 玉堂美術館



**玉堂記念木曾川図書館**  
【開館時間】 午前10時～午後6時  
【休館日】 10月20日(月)・27日(月)・11月4日(火)・10日(月)  
【観覧料】 無料  
【協力】 財団法人 玉堂美術館  
【交通案内】  
・公共交通機関ご利用の場合  
名鉄名古屋本線「新木曾川駅」下車、西へ徒歩約15分  
・お車ご利用の場合  
西尾張中央道「丸割田」交差点を西へ約100m  
【所在地】 一宮市木曾川町外割田字西郷中25  
☎0586・842346  
◎学芸員による展示説明会  
10月25日(土)・11月15日(土)  
いずれも午後2時～  
木曾川図書館3階展示室

## 利用案内

【観覧料】(常設展・聴講料含む、特別展の場合は別途定める)

一般=200円(160円) 高・大生=100円(80円)

小中生=50円(40円) \* ( ) 内は20人以上の団体料金

【休館日】 毎週月曜日、休日の翌日、年末年始(12/28～1/4)

【開館時間】 午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)

※市内の小・中学生は無料

※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料

※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

【所在地】 〒491-0922 一宮市大和町妙興寺 2390

【TEL】 0586-46-3215 【FAX】 0586-46-3216

【HP】 <http://www.icm-jp.com/>



【交通】 名鉄名古屋本線「妙興寺」駅南口下車徒歩7分  
ここにこふれあいバス「ユーストア妙興寺店」下車徒歩8分



第43号

発行日 平成20年10月10日

編集・発行 一宮市博物館

制作 日本印刷株式会社